

【第2分科会】子供の発達に関する課題

<p>提言2 研究主題</p>	<p>自己肯定感をもち、互いに認め、高め合うことができる生徒の育成（「授業づくり」「関係づくり」の取組と支援体制構築を通して）</p>
<p>提言者</p>	<p>小城市立小城中学校 教頭 原田 常昭</p>
<p>協議内容</p>	<p>【質疑応答】</p> <p>Q：小城中学校では、不登校生徒の現状把握をするために「見えるボード」を設置しているとのことだが、これは自分のクラス、学年だけでなく不登校生徒の全体状況把握には非常に良いものである。そこで、見るボードを設置しようとするきっかけは何だったのか教えてほしい。</p> <p>A：教育相談担当の主任だけがすべての不登校生徒を把握するのではなく、その他の職員もしっかりと把握し、いつでも他のクラスの生徒のことも互に意識し連携をとることができるように、情報を「見えるボード」で可視化することで共有化を図った。</p> <p>Q：校内研究としてKJ法等様々な取り組みをここ数年されてきておられるが、その際、年度が替われば先生方も入れ替わり、新しいメンバーにこれまでの研究も含めてこれからの研究方針を理解してもらうために、教頭としてどのように関わられてきたのか、また、研究主任にどのような根回しをされたのか教えてほしい。</p> <p>A：本校の研究が目指すところは学校評価に記載している。その学校評価を活用して、各部長に指示し、不登校生徒の現状課題を確認するとともに、これからの学校として目指す課題等について、共通理解を図った。新しく来た職員にとっては、難しい点もあると思い、研究主任に、学校が目指す課題へのアプローチとして、研究の柱を確認した。また、3つの部会（授業づくり部会、関係づくり部会、生徒支援部会）の取り組みについて、どのような見通しをもって取り組むのか、全職員で共通理解し、先生方の思いが同じ方向に向くように指示を行った。</p> <p>Q：研究初年度は、学校の現状課題をもとに研究に取り組んでいる分、職員はやる気に満ちて取り組むのだが、2年目、3年目と研究が進むなかで、先生方の当初の目的や研究への意識が薄れることが考えられる。それについてはどのような対処を教頭としてとられたのか教えてほしい。</p> <p>A：目指す生徒像およびそのためにクリアしなければならない課題ははっきりしているので、KJ法等の様々な手法を用いて職員研修を行った。先生方には、協力的に2年目、3年目以後にも主体的に研究に取り組んでもらっているところである。</p> <p>Q：教職員に研究のねらいをつかませるといふ説明があったが、そのために教頭としてどのように対応したのか、また、組織を動かすうえで苦労した点について教えてほしい。</p> <p>A：研究の狙いを教職員全体につかませるためにも、不登校生徒だけへの対応や研究ばかりしていても本校課題の改善にはつながらない。そこで、インクルーシブ教育の視点にたった授業づくりや学級づくりは外せない。つまり、特別支援教育の充実を図ることが大切であるということを、3つの部会長にことあるごとに伝えていった。また、教職員のやる気を保つためにも、各部会から出た意見やアイデアについては、生徒の実態に合うようにできるだけ修正し、研究に取り入れていくように努力した。</p> <p>Q：研究を動かす際、教頭が研究のすべてを受けもって一つひとつを動かすわけにはいかない。つまり、組織として、その研究を細かいところで受けもつ先生方をいかに動かすことができ</p>

	<p>るかが大切になってくる。この点において、教頭としてどのように対応されたのか教えてほしい。</p> <p>A：ご指摘の通り、教頭一人ですべてを動かすことは不可能である。そこで、各部長をミドルリーダーとして動かすようにした。ミドルリーダーの育成については、研究の方向性、研究の進捗具合、研究の悩み等について十分に議論を重ねるようにした。また、研究主任とミドルリーダーを育てながら、他の先生方の研究へのモチベーションをどのように保つのかは、教頭として悩む点が多かったと思う。</p> <p>【グループからの報告】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 現在、鍋島中でも学びあいを行っている。しかし、この学びあいを取り入れるにあたって、上から押し付けたというわけではなく、教頭として、今の学校の現状としての強みと弱みを職員の先生方に伝え、それについての解決策を探ってもらうなかで、鍋島中は学びあいが必要であると先生方自らが判断し、取り組んでいる。つまり、教頭としてどのような支援をすることでより良い学校になるのかを考えることが大切であると思う。この意味で、小城中学校では先生方に学校の現状から課題を導き出させる手法として、今回、取り組まれたKJ法は有効であったと思う。
<p>指導助言者</p>	<p>学校教育課 指導主幹 藤田 浩巳 様</p>
<p>助言内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 研究を進めるにあたって管理職として大切なことは、日頃の生徒との関りを通して、何が必要なのか、どのようなことで悩んでいるのかを把握する必要がある。そのために、教職員との意見交換会を開いたり、学校の課題と照らし合わせて、校内研究の持ち方を探ったりすることは大切なことである。今回、小城中でのKJ法を用いた手法はよかった。 ○ 不登校支援の取り組みについての報告では、その生徒の特性を考えながら段階的にどのような支援が必要なのかを見極めることが大切である、そのためにも、今回の小城中で取り組まれている組織的な取り組みの他、学校関係者との連携も必要と考える。管理職として連携がうまく機能しているのかを判断・確認することが大切である。 ○ 不登校を生まないために、管理職としてどのように意識すべきなのかは、以下の4点である。 <ol style="list-style-type: none"> 1 学校全体の課題を共有する場（場面）をつくられているか。 2 不登校の未然防止と共に初期対応の在り方について検証しているか。 3 不登校生徒への支援の在り方を検証しているか。 4 教頭は、教職員の役割分担はできているか。（支援の方策は適切か）